

「現代アメリカ神学思想への問題提起—
ピーター・バーガーの資本主義
擁護論をてがかりに」

英米文化学科教授 鈴木 有 郷

はじめに

この十数年新しいうねりが世界に生まれつつある。ソビエトや中国等の社会主義国では20年前には想像すらできなかった市場の開放や私的利益の追求といった資本主義への関心がみられるようになった。その一方で、アメリカや西ヨーロッパ諸国では、過剰な競争主義と利益追求が結果する孤独や人間不信という資本主義のネガティブな面が批判と反省の対象になっている。つまり、社会主義国では資本主義が見直され、資本主義国では社会主義への関心が高まりつつある。これが現在の世界の新しいうねりである。この世界的な時代のうねりに対する反応としてアメリカに登場したのが保守派による資本主義擁護論である。われわれはこの資本主義擁護論がアメリカ神学にどのようなチャレンジを提供しているかを解明していくつもりである。その試みは単に狭義の神学思想の領域に留まらず、現代アメリカの思想的傾向の把握につながり、引いては1990年代に入ろうとしているアメリカ合衆国の在り様を理解する手助けになると思うからである。

I. 問題の背景

アメリカの神学思想の特徴の一つとして、この世のあらゆるものは神の摂理の下にあるという信仰をバネに人間の営みのすべてにレレヴェントに

係わるこの世への積極的、能動的姿勢を挙げることができる。信仰の自由の確立、独立革命、奴隷制の撤廃、二つの世界大戦とその後の冷戦と核戦争の危機、公民権運動、ベトナム戦争、そして女性解放運動に生命医学の問題等それぞれの時代にアメリカが直面した具体的な問題と取り組むことによってアメリカ神学は固有の発展を遂げて来た。

しかしこのようなアメリカ神学においても神学的考察の対象から外されて来た領域があった。アメリカ合衆国経済の基盤である資本主義がそれである。世直しの必要性を正面に押し出した社会派の教会運動ソーシャル・ゴスペルの立役者ワルター・ラウシェンブッシュ（1861-1918）さえ、アメリカ資本主義の構造を批判の対象にしたことはなかったのである。一人の例外が神学者として政治を論じて飽くことのなかったラインホルド・ニーバー（1892-1971）である。

1. ラインホルド・ニーバーと資本主義

1932年に『道徳的個人と不道徳的社会』をひっさげて華々しくアメリカ思想界に登場したニーバーは、その2年後『一時代の終焉に関する考察』の中で、資本主義を貧しき者への抑圧と社会悪の元兇であるとして激しく糾弾し、社会主義国家としての新しいアメリカの到来を予告した。

「キャピタリズムは死に瀕している。そしてそれは死んで当然であり、実際死ぬべきなのだ」という彼のラディカルな主張は、資本主義という経済システムに何の疑問も抱いていなかった大方のアメリカのインテリに大きな衝撃を与えた。1930年代にアメリカにおいてソーシャリズムをめぐる活発な論議が展開されたのは一重にニーバーの影響によるものだと言って過言ではない。

1929年のウォール街におこった株式恐慌は、第一次大戦後の経済的発展で「永久の繁栄」を誇り、不健全な投機的投資をさかんに行っていたアメリカの経済界に大打撃を与えた。ニーバーの社会主義待望論はこの大恐慌を背景にいよいよ活発に展開されることになった。この崩壊を目前にしたアメリカ経済を建て直すために計画されたのがローズヴェルト大統領の

「ニュー・ディール」である。その成功はニーバの思想に根本的転換を強要するものであった。社会主義か資本主義かの二者択一ではなく、連邦政府の手になる社会保証や社会保険制度の導入、それに国家がイニシアチブを取る産業復興といった社会主義的要素を資本主義の中に取り入れる可能性にニーバーの目を開かせたからである。30年代の後半においてニーバーは理論的不整合に目をつぶってでも実践的效果を重視するプラグマティストに変身した。

さて、第二次世界大戦の終結は、ナチスに対する勝利者、日本の民主化の原動力、ソビエトの膨張主義への歯止めの力といったアメリカの国家的イメージを強め、「自由の味方アメリカ」は国際政治の桜舞台に踊り出ることとなる。この国際社会におけるprestigeの向上とあいまって世界の目を見張らせたのが、すさまじいまでのアメリカの経済的繁栄である。大戦後の世界が深刻な食糧不足と劣悪な住宅事情に悩まされていた頃、アメリカ人の多くはセントラル・ヒーティングの家に住み、自動車を運転し、ステーキとアイスクリームを頬張ることができた。

このような状況の中で多くのアメリカ人が合衆国を民主主義の守り神とみなし、その未曾有の経済的発展を己が徳に対する神よりの正当な報酬であると考えたとしても不思議ではない。この国家的自己優越感を偶像崇拜であるとして厳しく批判したのがラインホルド・ニーバーその人であった。その意味で、彼は決してある人々が批判するようなアメリカの国益と権威の維持にきゅうきゅうとする「冷戦のイデオログ」ではなかった。

しかし、現在の時点から当時を振り返る時、ニーバーといえども時代の子であったという事実は否定できない。晩年の彼が痛みを持って告白したように、1950年代のニーバーはそれまで彼が抱き続けて来たアメリカ資本主義に対する懐疑的、批判的態度をあいまいにしまった^①。アメリカにとって政治と経済は解決済みの問題であるとする「アメリカ史の皮肉」（1954年）の中でなされたニーバーの主張は当時の彼のアメリカ資本主義に対する自信の程を伺わせて余りがある。

2. パックス・アメリカナの崩壊

ニーバーの中でアメリカ民主主義とその経済システムに対する自信が大きく崩れ始めたのは1960年代に入ってからのことである。ジョン・ケネディーの「ニュー・フロンティア」からリンドン・ジョンソンの「偉大な社会」へと引き継がれて行ったパックス・アメリカナは、60年代も後半に入ると次第に凋落の兆しを見せ始めた。若さの魅力と新しいヴィジョンを掲げてさっそうと登場したケネディー大統領は任期の満了を見ずに暗殺された。ジョンソン政権下におけるベトナム戦争の泥沼化は、戦争の賛否をめぐってアメリカの世論を真っ二つに引き裂き、「偉大な社会」の試みはあえなく挫折した。一方、マーティン・ルーサー・キング博士の非暴力主義に飽き足らぬものを感じていた黒人の若者層の間には、「ブラック・パワー」をスローガンに白人社会の人種主義に対して武器を取れと叫ぶラップ・ブラウンやマルコムX等の過激派の勢力が日に日に強くなりつつあった。その混乱の真只中でキング博士も又兇弾に倒れたのである。

ここにおいて、アメリカに対する自信と信頼は消滅し、60年代初期のアメリカを彩った未来への希望は粉碎され、パックス・アメリカナは崩壊した。白人間の保守主義のやり戻しは活発になり、リベラル派陣営の混乱も手伝って、共和党の実力者リチャード・ニクソンが大統領に当選した。1968年は11月のことである。このような状況の中で晩年のニーバーはアメリカの民主主義に対して懐疑的にならざるを得なかった。亡くなる数ヶ月前、ベッドに横たわってテレビのニュースを観ていたニーバーが、ニクソン大統領の顔が大写しになったとたん、「あの馬鹿者が！」と吐き捨てるように言うと、わざわざ起き上がってテレビのスイッチを消したというエピソード^②がそれを如実に物語っている。同じ事が彼のアメリカの資本主義に関する立場にも言える。企業は富める人々の利益を代弁する利益集団と化し、貧富の差は縮まるどころか広がる一方となった。外に向けては多国籍企業による第三世界の資源の収奪がますます横暴を極めていた。このような状況を鑑みた時、晩年のニーバーはそれまでの彼の経済の問題

はアメリカにおいては既に解決済みの事柄であるという立場に大幅な修正をほどこさざるを得なかったのである。

3. 「解放の神学」の登場

アメリカ固有の民主主義とその経済機構に疑問をはさむという事は、これまで疑うことのなかった神の摂理の器としてのアメリカ理解をその根本から問い直す事を意味した。アメリカは果たして神の摂理の器なのか。ニーバーという偉大な指導者を失った1970年代から80年代にかけてアメリカ神学はこの問を前にして呻吟することとなった。それに答える試みの一つがラテン・アメリカから提起された。「解放の神学」がそれである。

「解放の神学」とはラテン・アメリカのカトリック教会の土壌が生み出した神学である。それは、アメリカ合衆国はその経済的、政治的利益追求のためにラテン・アメリカの右翼的政治権力と結託し、民衆への抑圧に加担してきたという認識の上に成り立っている。この認識がラテン・アメリカのカトリック教会も又反共と経済発展を名目に抑圧的政治状況を黙認し、資本主義の歪みを看過してきたという自己反省を促し、第三世界の民衆の解放を考えずに神学は成立し得ない、という新しい自覚が誕生した。この批判と反省を神学的に論理化し、発展させたのが「解放の神学」である。第三世界の民衆の抑圧を出発点にしなければならないと主張するこのラディカルな神学は、神の摂理の器としてのアメリカ理解をその根本から問い直すものであったが故に、現在に至るまで様々な反響を巻き起こしている。

この「解放の神学」に対して強いアメリカの再生を訴えて対抗しようとした一人の社会学者で神学に関する著作もあるピーター・バーガーである。彼は資本主義の発展が民主主義の必要条件であることを証明することによってアメリカの経済機構と政治機構の両方の正当化を試みる。神学的解釈や神学用語の駆使を意識的に排除し、実証主義に撤しているにもかかわらず、バーガーの究極的意図が伝統的な神の摂理の器としてのアメリカ理解の再生であることに疑問を抱く余地はない。

『民主的資本主義の精神』をものしたマイケル・ノバクや『裸にされた公共の広場』の著作リチャード・ニューハウスと共に、企業の献金で設立された「ロックフォード研究所」を足場にアメリカのヘゲモニーの復興を訴えていることからそれは明らかである。

II. 資本主義への傾倒

1. 第三の道の模索

バーガーの資本主義擁護論の理解には、彼が1974年にものした『犠牲のピラミッド』^③がてがかりを与えてくれる。

70年代は第三世界の存在が世界の注目を浴び出した時期である。特にその想像を絶する貧困は既に触れた合衆国の責任を糾弾する「解放の神学」の台頭とあいまってアメリカ神学にとってもはや無視することのできない大きな問題となっていた。果たしてアメリカ合衆国は資本主義国家であるが故に抑圧的なのか。社会主義は世界の未来を救う希望なのか。この問いに真正面から挑んだ一人がピーター・バーガーであった。社会学者である彼は、そのために大量の文献と取り組むとともに、ラテン・アメリカに幾度となく旅をして自らの目でラテン・アメリカ諸国の貧困と抑圧の状況を実際に観察した。『犠牲のピラミッド』はそれを基に提供された彼の暫定的な結論であった。

その主張は明瞭である。資本主義も社会主義も貧困と抑圧を克服する力を持っていない。経済的生産力が高まり、GNPが増せば自ずと貧困と抑圧は克服されると考える資本主義は余りにも楽観的である。一方社会主義は革命の必要性を主張する余り、それに付随する流血や残虐に対する歯止めについて無関心である。従って社会主義革命が現状をより良きものに変革し得るという保証はどこにもない。それでは第三世界はこれからどうすればよいのか。社会主義か資本主義かという硬直した二者択一から解放されることだとバーガーは主張する。国それぞれの状況に応じて社会主義と資本主義のメリットとディメリットを臨機応変に取捨選択する柔軟な姿勢こそ今の世界が最も必要としているものだと言うのである。

状況に応じて二つの対極的な経済システムを取捨選択するという場合、何を基準にそれを行ったらいのか。バーガーは次の二つを提案する。即ち、民衆を拷問、飢え、高い幼児死亡率、低い平均寿命率等の苦しみから解放し、習慣や伝統の維持によって日常の生活を枯渇化から守るというこの二つである。この二つの基準を遵守することによって社会主義が陥りやすい力の傲慢と資本主義が陥りやすい富の傲慢に歯止めをかけながら第三の道を模索することができるとバーガーは主張した。

要するに、社会主義と資本主義の悪しき面を回避した折衷案を編み出すことである。バーガーは第三世界における資本主義国のモデルとしてブラジルを、社会主義国のモデルとして中国をそれぞれ挙げ、それら二つとも発展途上国が歩むべき道ではないとする。資本主義国に変貌するためにブラジルが行なった短期間における大規模な工業化は国民の生活のリズムを破壊し、個人を孤独と根なし草的存在へと追いやってしまった。一方中国は社会主義国家の確立という目的のために千万単位の民衆を殺害したり、強制移動させたりした。彼らの肉体的な苦痛は勿論、精神的苦しみは我々の想像を絶するものがある。第三世界の国々がブラジルと中国の落とし穴のどちらも避けながら、その中間の可能性を現実的オプションとして追求して行くためには、何にもまして上に挙げた二つの基準を守ることが必要だとバーガーは主張する。

以上の事から、第三世界のためにアメリカが取るべき道は明白である。それは、あくまでも第三世界の自発的選択を妨げないことだ。アメリカは彼らのチョイスに口出しするのではなく、世界の先端に行く近代社会の実験を続けて行くべきなのだ。そして第三世界がそこから学ぶべきものを学び、避けるべきは避ける参考資料として自らを提供するが良い。

しかし、このような『犠牲のピラミッド』においてバーガーが固執した資本主義にも社会主義にも一定の距離を置く姿勢は1970年代の半ばを境に次第に資本主義擁護論に移動して行くことになる。

2. 東アジアへの注目

バーガーが「犠牲のピラミッド」で試みた第三の道の模索に終止符を打って資本主義に大きく肩入れするようになったのはなぜか。1977年に東アジアの政治的、経済的状況をその目で直接見る機会に恵まれたからだと言はう。『資本主義の革命』^④(1986年)はそのあたりの事情を詳しく説明している。

彼は東アジアの資本主義の国々が経済的に繁栄を極めている事実に注目する。日本が世界に冠たる経済大国であることは周知の事実であるが、その日本に韓国は追いつき、追い越す勢いを見せている。現にその自動車産業はアメリカへの輸出において日本車に迫っている。1963年から74年にかけてのG N Pの伸び率は平均10%以上である。経済成長の点で韓国に次いでめざましい躍進を遂げている国として台湾を挙げることができる。この30年間台湾のG N Pは平均9.2%の増加率を維持している。個人の年間平均所得は中国の6倍という。ホンコンはどうか。1960年から80年にかけてG N Pの伸び率は平均7%を上回っている。1976年には何と18.8%という信じがたい程の数字を残している。シンガポールは産業復興に国運をかけ、その近代化は世界の目を見張らせるものがある。1955年から74年にかけての8.3%というG N Pの伸び率は台湾に迫る勢いを見せている。

一方、社会主義国の経済的停滞は歴然としている。ベトナムとカンボジヤは悲惨な戦争や内乱によってその経済的基盤が根こそぎ破壊された事を考慮に入れても、その回復力の貧しさは目を覆うばかりである。経済が国家権力の統制下に置かれる時、国民の間の経済復興への意欲は大幅に阻まれる。資本主義のメリットに目をつぶる限り、ベトナムとカンボジヤの経済復興はおぼつかない。かつて第三世界の希望の星として世界の注目を浴びた中国は、未だに経済の問題に解決を与えることができないでいる。産業力のみならず農業力さえ停滞している。中国政府の主張とは裏腹に、現時点において(80年代の前半)民衆が飢えから解放されたとはとても言

えない。それは個人の意欲と活力を削いでしまう社会主義の経済政策の典型である。

東アジアを一瞥して一目瞭然なのは資本主義国は経済的に繁栄しており、社会主義国は貧困にあえいでいるという事実であるとバーガーは言う。しかもそれらの国々間の相違は経済の領域に留まらない。政治的状况に関する相違はそれ以上に顕著である。確かに韓国や台湾やシンガポールは日本のような民主主義国家ではない。政治活動は大幅に制限されているし、政治犯の存在と彼らの人権の侵害は国際的な非難を呼んでいる。しかし、それらの国々ではどの宗教を信じようと、どの職業を選ぼうと、どこに住もうと、それは個人の自由である。それらは民主主義国家とは言えないまでも、宗教や個人の好みにまで政府が介入し、コントロールする全体主義国家ではない。つまり、政治以外の領域では個人にある程度の自由を許している独裁主義国なのだ。独裁主義は決して最も望まし政治機構ではないが、全体主義よりも数段人間的なシステムであると言える。

ひるがえって社会主義国家の現実を見よとバーガーは読者に訴える。あの文化大革命は何であったか、毛沢東のイデオロギーで国民の生活のすべてを完全にコントロールし、それに見合わない者を異分子として排除しようとした国家のお先棒をかついだ大衆運動ではなかったか。それは、全体主義の特徴を最も端的に現わした、人類の歴史に汚点を残す不幸な出来事であった。それでは北朝鮮はどうか。その閉鎖主義、秘密主義は世界を極度の不安に陥れている。金日成に対する個人崇拜とそれに必然的に付随する権力の集権化は、韓国の独裁政権が到底なし得ない残酷な国内政策の施行を可能にしている。カンボジアのポル・ポト政権が行ったジェノサイドは国民を完全にコントロールする全体主義国家であったからこそなし得た蛮行である。軍事大国アメリカに対して徹底的に抵抗したということで世界中から英雄視されたベトナムでさえ、戦後は国家復興を理由に国民生活のすべての領域をその統制下に置いているのである。

以上見たように、経済的に豊かで、政治的にも比較的開かれた東アジア

の国々はすべて資本主義国家である。経済的な貧困と政治的抑圧を解決できずにいる他の国々はすべて社会主義国家である。これは単なる偶然ではない、とバーガーは考える。ヨーロッパやアフリカにも同じ現象を見ることが出来るからである。経済的には貧困にあえぎ、内発的な改革を許さない一枚岩的政治政権を維持している国はおしなべて社会主義国家である。経済的に比較的恵まれており、政治的にもこれらの社会主義国家に比べれば開放的な国々はこれ又おしなべて資本主義国家である。以上の考察からバーガーは一つの結論を導き出す。即ち、資本主義は民主主義の形成と維持のための必要条件だとする主張がそれである。70年代の後半から現在に至る彼の学問的関心がもっぱら資本主義と民主主義の密接な関係の解明に注がれているゆえんである。

Ⅲ. バーガーの資本主義擁護論の基盤

資本主義も社会主義も人間が操作するシステムであるが故に、完全性を期待することはできない。従って、この二つの不完全で相対的なオプションの中からどちらがより良いシステムであるかを識別し、それを発展させて行くことが現在の人間に課された責任なのだ。こう主張してバーガーは『犠牲のピラミッド』で試みた「第三の道」の模索を諦め、社会主義を捨てて資本主義を選ぶことこそ最も現実的な道であると考えようになった。この過程の中で試みられたのが、資本主義の社会主義に対する優越性の論理的証明である。^⑤

1. 資本主義と民主主義

資本主義が社会主義よりも好ましいオプションである理由の一つに、近代民主主義に不可欠な主体的個人の形成に土壌を提供して来たことが挙げられる。主体的個人—それは、人間は罪の悔い改めを迫る神に対して応答する責任的存在であるとする聖書の人間観と、理性と良心に照して行動する自律性こそ人間の人間たるゆえんであるとするギリシャ哲学の二つの思想的流れを背景に持っている。この主体的個人という理念が、18世紀以降

世界の文化のダイナミズムに大きな影響を与えたのは一重に資本主義の台頭と機を一つにしたからである、とバーガーは主張する。

一言で言えば、資本主義の市場機構が人間を血縁関係と階級社会から解放したということである。人間は自己の可能性を制約するこれらの殻を突き破り、自力で己が未来を築いて行く個人となることができた。いかなる階級に属し、誰を先祖に持つかではなく、自分に与えられた潜在的可能性に忠実であるかどうかが人間の自己評価の基準となった。活動的で自己規律を重んじ、冒険心に富み、新しさを好み、何事にも積極的な人間の誕生である。主体的個人という概念は、資本主義という経済システムに支えられた時、人間とその世界を根本から揺り動かすリアリスティックな力となったのである。

個人としての人間には、封建社会の階級や村が提供した横の連帯が欠落しがちである。人間の解放は、孤独と疎外にさいなまれてアトム化した人間を生む危険を内包している。それに歯止めをかけるのが家族であり、宗教なのだ。人間が古い連帯感と新しい孤独感の両方から解放される時、初めて主体的個人の誕生は可能となる。確かに資本主義は決して良い事づくめではない。しかし、だからといって原始時代や封建時代の方が資本主義の影響下にある現代よりも全体的に良い時代であったと真面目に考える人はいない。過去に人間が経験した様々な束縛に比べれば、資本主義の弊害を考慮に入れてもその人間化への貢献の何と大きいことか。

主体的個人という理念にリアリティーを与えたのが資本主義である。しかし、資本主義がそのまま民主主義につながると結論することはできない。それは現在の資本主義国家の現実を見れば明らかである。しかし、バーガーの見るところ、資本主義は権威主義に陥ることはあっても、全体主義に陥ることはないのである。この点で資本主義は社会主義より優れているとバーガーは言う。ここで我々は権威主義と全体主義を明確に区別することが彼の資本主義擁護論に不可欠な要素であることを理解するのである。

バーガーが全体主義という時、彼が思い浮べる具体像はナチズムでありスターリニズムである。一言で言えば、国家の統制が公と私の両方の領域

を細部に渡ってがんじがらめにコントロールする政治機構を指す。この全体主義は二つのたぐい稀な能力を持つ。一つは国家の最終目的は絶対的理想であり、善であるという確信を国民に強制する能力である。他の一つは、自己を投げ売って積極的に国家権力につくす統一されて献身的な国民を形成する能力である。この権力の国家への絶対的集中こそ全体主義の特徴なのだ。全体主義が現代の最大の危険であるとバーガーが考えるゆえんである。

それでは権威主義とは何か。それは全体主義以外のすべての従属形態、即ち専制、少数独裁制、植民地支配等を指す用語である。権威主義体制の下では政治批判の自由、集会の自由、投票の自由こそ大幅に制限されるが、その他の領域に国家権力が介入することはない。いかなる宗教を信じようと、奇抜なファッションで街をかつぽしようと、家庭の教育方針が何であろうと、政治に抵触しない限り国家がどうこう言うことはない。その意味で、ブラジル、チリ、アルゼンチン、韓国、フランコ時代のスペイン等は皆権威主義国の範ちゅうに入る。毛沢東の中国、ブレジネフのソビエト、アルバニアやキューバ等と比較すれば全体主義国との違いは明瞭である。

資本主義は曲がりなりにも個人を尊重する。従って全体主義と原理的に矛盾する。資本主義国をして最悪の場合でも権威主義に留め、全体主義にまで墮落させない理由がここにある。それは確かに資本主義の社会主義に対する優位性を証明する有力な証だとバーガーは主張するのである。

2. 資本主義と第三世界

「解放の神学」の登場を待つまでもなく、資本主義はその弱肉強食的傾向故に第三世界を破壊するものだという批判は、60年代後半からアメリカでも聞かれるようになった。バーガーは社会主義こそ抑圧と搾取を克服するにふさわしいシステムであるという結論を真っ向から否定する。強者に対して弱者が不利であることは資本主義も社会主義も変りはない。大国が小国に対して搾取的であり、抑圧的であるのはなにも大国が資本主義国だからではない。搾取と抑圧は力の格差と人間の業（ごう）によるのであ

って、社会主義国の間においてもなんら変るところはない。それが証拠にはソビエトとその衛星国の関係を見よ。

資本主義は物質主義の土壌であるという批判も誤りである、とバーガーは言う。主体的個人の理念は資本主義社会においてこそ生き続けていくことができる。人権の問題が公の場で討議され、取り組まれている国がおしなべて資本主義国であるゆえんである。人権が国家によって侵害されている国はこれ又おしなべて社会主義国である理由を考えよ。中国の少数者支配を見よ。ソビエトにおける強制収容所の実態を思い出せ

しかし、バーガーによれば、資本主義社会において主体的個人がリアリティーを持っている理由は、何にもまして「平等」の概念が浸透していることにある。資本主義にとって平等とは、能力、経験、意欲、知性、経験等の差異を認めながら、潜在的可能性を発揮するための機会はずべての人間に平等に与えられねばならないとする「機会の平等」である。それは社会主義が主張する個人の差異を無視した国民の均質化としての「結果の平等」と同義ではない。「結果の平等」が官僚化と画一化を招き、国民から働く意欲を削いでしまうのに対して、「機会の平等」は人々の間に働く意欲を植えつけ、現状からの脱皮を可能にする。資本主義社会において階層の流動化が社会主義社会のそれを大きく上回っている理由である。

3. 社会主義の落とし穴

バーガーにとって、これからの世界が歩むべき道は資本主義であり、社会主義ではない。にもかかわらず、アメリカ合衆国において社会主義への憧憬の度合いが強まっているのは何故か。

それは、社会主義の理想が人々を幻惑するからなのだ。社会主義はずべての人間に完全な平等を賦与することのできる社会の確立を真正面に押し出す。それは、人類の崇高な理想の表白であるだけに、それに心を動かされる人をして自らを理想実現の前衛であるかのような幻想に浸らせる。一方、資本主義は理想ではなく、もっぱら現実に固執する。この社会を少しでも住みよい社会にするためには今日の前の問題にどのような解決を与え

るべきかを真剣に問い、実践可能な現実的方法を編み出すよう努力する。理想を夢見る社会主義と現実に固執する資本主義を比較した場合、前者が素晴らしく、後者が何ともみすぼらしく見えるのは当然である。しかし我々は理想と現実を単純に比較する愚かさを犯してはならない、とバーガーは言う。資本主義の現実と社会主義の現実を具体的なデータに照らし合せて比較、検討することこそ現在最も必要とされていることなのだ。^⑥

つまり、社会主義の落とし穴はそのユートピアニズムにあると言って過言ではない。社会主義は貧富の差を撤廃し、抑圧と搾取を完全に克服できるという思い込みはバーガーの見るところ危険きわまりないものだ。何故か。人を自己絶対化に追いやり、目的のためには手段を選ばない残酷を結果するからだ。資本主義が多様性を可能にするのに対して、社会主義が批判を許さない全体主義に直結せざるを得ない理由の一端がここにある。

バーガーによれば、社会主義特有のユートピアニズムに幻惑されて資本主義の伝統に過剰に批判的な知識階級がアメリカ合衆国に出現しつつある。「ニュー・クラス」と呼ばれる人々がそれである。具体的には、ジャーナリストや精神医学者、リベラルな神学者、それにレーガン以前の民主党政権を支持した東部のインテリ等を挙げることができる。彼らは資本主義の競争の原理を一方向的に否定し、政府の介入による「結果の平等」に固執する。アメリカにおいて社会主義的風潮が次第に国民の間に浸透しつつあるのは「ニュー・クラス」の影響なくしては考えられない。

しかし、「ニュー・クラス」は心から社会主義を信奉しているのだろうか。バーガーの答えは「否」である。彼らが社会主義を支持して来たのは、それが彼らの利益につながっているからである。高等教育機関は政府の補助金を必要とする。ジャーナリストにとって世間の注目を浴びる最も手っ取り早い方法は、アメリカ経済の基盤である資本主義を批判することだ。怠惰を指摘してそれを克服するように勧めるよりは、個人を社会がもたらす孤独の犠牲者と見る方が精神医学者は仕事がやりやすい。リベラルな神学者は「解放の神学」にこびを売ることによってギルト・コンプレックスを解消できる。連邦政府による厳しい環境規制を主張する人々は、「大きな政府」

が造り出した行政関係の仕事にありつくことができる。国家がイニシアチブを取ることによって人種差別に解決を与えることができると考える人々も同じである。

要するに、バーガーが一貫して読者に訴えるのは、我々は社会主義の理想に幻惑されてはならないという主張である。資本主義の現実を具体的なデータに基づいて分析し比較する時、資本主義の優位性は疑うことのできない事実としてクローズ・アップされるに違いない、と言うのである。

IV. バーガーへのアメリカ神学の応答

以上概観したピーター・バーガーの資本主義擁護論は、アメリカ合衆国のレーゾン・デートルに密接に係わるものであるが故に、アメリカ神学が無視することができない問題を提起していると言わねばならない。アメリカ神学は、その誕生の時代から現在に至るまで一貫して神の摂理の器としてのアメリカの意味を追求して来た神学である。マーティン・マーティン^⑦も指摘するように、過去において、この問いに無関心な神学はいかなる思想的インパクトも与えることができなかったのである。それでは、アメリカ神学はバーガーにどのように応えるべきなのだろう。我々はここでこの問いに答えようと思う。そのためには、バーガーの主張の底に潜む問題の幾つかを指摘する手続きを踏まねばならない。

1. バーガーの問題点と挑戦

バーガーの批判が資本主義に向けられる時、その矛先が極端に鈍るという傾向は否定すべくもない。経済的原動力としての資本主義に注目しながら、その破壊的、非生産的な側面にはほとんど触れていない。個人の創造的可能性を引き出すに最適なシステムとしての資本主義を強調するあまり、生産のコストを引き下げて最大の利益を上げようとして容赦なく弱者を切り捨てる競争主義の暗い部分が批判の対象から外されている。この資本主義に対する批判の甘さが彼の資本主義擁護論の最も顕著な特徴である。

バーガーの資本主義への過剰なまでの肩入れは、彼の分析から客観性を欠落させる原因になっている。それを示す一つの例が「機会の平等」と「結果の平等」の区別である。この区別が意味を持つためには、アメリカ資本主義は健全な経済競争の上に成り立っているという前提が不可欠である。その前提は正しいものであろうか。否である。大企業が中小企業をすべての面で圧倒している現実を否定すべくもない。少数民族の多くは貧困や人種差別等のハンディを負わされており、そのために同じスタート・ラインに立つことができない。「結果の平等」がいかにか現実から遊離した抽象的な概念であるかが分かっていくものである。

現実そのものを無視してまでも資本主義の優位を強調するバーガーの資本主義擁護論の目的は何か。その意図はアメリカの覇権主義の正当化にあると我々は考える。そのことは彼の全体主義と権威主義の質的区別に明らかである。権威主義と全体主義を明確に区別する試みは、ハンナ・アレントの『全体主義の起源』（1951年）を機にアメリカの政治学者の間で注目されるようになった。それは確かにナチスやスターリニズムの暴虐性に対する批判原理として有効であった。しかし、アメリカ合衆国の外交政策の弁護の武器として使われる時、批判原理としての機能は停止され、現状肯定、自己保身の原理に逆転する。「権威主義」を「全体主義」から切り離して正当化しようとするバーガーの試みの究極的な意図は正にここにある。このバーガーの全体主義と権威主義の質的相違を強調する立場に比べて、「権威主義的支配のもっとも戦りつすべき形態として全体主義を捉らえるほうがよい」^⑤とするマイケル・ワルツァーの立場の方がはるかに現実に即応しているように思われる。

要するに、資本主義こそ世界を救う経済システムであるというバーガーの主張自体大きな無理をはらんでいるというのが我々の結論である。社会主義と資本主義の弱点を回避する第三の道の模索こそ我々に必要とされているのではなかろうか。「資本主義の革命」から「犠牲のピラミッド」へ立ち返ることだと言い換えることもできよう。社会主義には政府の肥大化

と経済停滞につながる面が確かにある。しかし、果たして資本主義が理想とする「小さな政府」が奴隷制の撤廃や公民権の法案化に成功し得たであろうか。資本主義と社会主義の注意深い、巧みな折衷を模索する健全なプラグマティズムの復興が待たれるゆえんである。

ここで我々はバーガーの資本主義擁護論が暗黙の内に提起する「神の摂理の器」としてのアメリカ観が持つ根本問題を指摘することができる。人間同士の連帯に不可欠な「共に生きる」という視点が欠けているということ、これである。彼がより良いオプションとして掲げる資本主義社会の目的は消極的には利害の衝突の回避、積極的には利益の交換の域を出るものではない。他者との関係を己が利益の視点からしか考えることができない国民、国益に固執するあまり、他国の立場に立って国際状況を考えることができない国家の姿しか具体的に浮かび上がって来ないゆえんである。人間の自己中心性を裁き、再生させる超越の次元をバーガーは欠いている。アメリカ合衆国の覇権主義とアメリカ社会の競争主義を積極的に肯定する彼の姿勢はその端的な現われである。

こう見てくると、ピーター・バーガーの資本主義擁護論は、「神の摂理の器」の再解釈に関するアメリカ神学へのチャレンジだと結論することができよう。「共に生きる社会」としての理念の確立に神学はいかに貢献できるかという問いをクローズ・アップするものであるとも言える。

この挑戦に応えるためにアメリカ神学はいかなる道を歩めばよいのか。少なくとも、アメリカの現状を肯定的に捉らえるバーガ一流の方法が生産的な結果をもたらさないことは明瞭である。しかし、それはバーガーの立場と対極的な「解放の神学」をそのまま無批判に受け入れることを意味しない。アメリカ合衆国の存在そのものを根本から否定する激しさの前では絶望に根ざした罪責感 (remorse) が自己防衛的反発はあっても、新しい出発を可能にする悔い改め (repentance) は生まれない。アメリカの再生に関する神学からの貢献が可能であるとすれば、それはアメリカの歴史を振り返り、「神の摂理の器」の理念をピューリタニズムにまでさかのぼって反省することにあると我々は考える。

2. 「神の摂理の器」としての自己理解

ピューリタンは新世界に新しい共同体を形成するよう神に召し出されたという使命感に溢れた人々であった。自分が選び出されたのは、あくまでも神の恩寵によるのであり、自分にその資格があるからではないという覚めた自己理解がそこにあった。彼らの思想を特徴づけたもの—それは彼らを摂理の器として選びたもうた神への深い感謝であり、与えられた使命への強い責任感であった。それは同時に、この世のすべては神の摂理の下にあるが故に彼らの関心の対象でないものはなに一つない、というピューリタン特有の信仰理解に直結している。

このように初期のピューリタンたちは魂においては勿論、勤労や政治においても神の摂理を識別して生きようと一生懸命であった。彼らの勤勉は恵まれた自然条件とあいまってその生活を次第に豊かなものにしていった。それにつれて彼らは、神による選択は勤勉という己が徳に対する正当な報酬であると思い始めるようになったのである。このような思想的風潮の中で、貧困や無教育を怠惰に対する神の裁きであるとするアメリカ特有の弱者切り捨て、強者礼賛的傾向が芽生え出したのはむしろ当然であった。社会の底辺にいる人々を神の摂理の領域から排除しようとする傾向が強まったと言い換えることもできよう。原住民大虐殺や、人種・民族差別にピューリタニズムが無関係であったとは決して言えない。

要するに、ピューリタニズムにはアンビヴァレントな要素が複雑に絡みあっているが故に複眼的な見方を必要とする。それは共同体の形成を神に対する責任と考える社会正義への積極的関与の原動力であったと同時に、特権意識と弱者に対する抑圧の源でもあった。奴隷制撤廃に命をかけた人たちの多くはピューリタンの流れをくむキリスト者であったが、奴隷制を神の意志であるとして正当化したのも又キリスト者であった。公民権運動を推し進めた人々の多数はキリスト教徒であったが、彼らの行進に罵声を浴びせたのもキリスト教徒であった。信仰に押し出されて女性解放運動にたずさわる女性が女性差別の元兇として厳しく批判するのは他でもない彼女

たちの信仰を育てた筈の教会なのだ。確かにベトナム反戦運動はキリスト者の地道な支持をその基盤に持っていたが、アメリカのヘゲモニー維持のためには核武器の使用も辞してはならないと主張する反動保守主義者の多くはこれ又クリスチャンなのである。

正しい「神の摂理の器」としての自己理解にはピューリタニズムが不可欠だというのは正しいが、それだけでは十分でない。ピューリタニズムの何に立ち返るべきかを検討、模索することが大切なのだ。現時点において再生されるべきピューリタニズムの伝統とは少なくとも次の二つを含むものであることに疑いの余地はない。即ち、力の傲慢を悔い改める砕かれた心と歴史の中に神の摂理を識別する眼（まなこ）である。前者はアメリカが陥りやすい一人よがりの独断と偽善に歯止めをかけ、後者は信仰が政治を含む人間の生のすべての領域に深くコミットするパン種的力であることを認識させてくれる。「解放の神学」との対話もこの点を踏まえてなされる時、初めて真に生産的なものとなろう。

む す び

アメリカがこれから特権意識を克服して人間的な暖かみのある社会に自己変革して行くかどうかは、もう少し時間がたってみなければ分からない。しかし、ピューリタニズムのポジティブな伝統が市民の間に地味な形ではあるが引き継がれていることは確かな事実である。現在多くの教会で人種の異なる子供を養子に迎えた家族を目にするが、これなどは健全なピューリタン・スピリットの継承の一形態ではなかろうか。彼らが、異質なものに対して不寛容になりがちな現代人に、ポスト・モダンを生きる人間の姿勢に関するヒントらしきものを与えているように思えてならない。ともあれ、ピーター・バーガーの挑戦を受けて立つアメリカ神学に課された最も重要な課題とは、細部に渡って理論的に展開された組織神学の形成ではなく、社会をより開かれたものへとたえず突き動かす健全なピューリタニズムをその基

盤に持った新しいアメリカの模索である。

注

1. 拙著『ラインホルド・ニーバーの人間観』, 教文館, 1982, 168 ページ。
2. Richard Fox, *Reinhold Niebuhr* (New York: Pantheon Books, 1985), p. 290.
3. Peter L. Berger, *Pyramids of Sacrifice* (New York: Basic Books, Inc., Publishers, 1974)
4. Peter L. Berger. *The Capitalist Revolution* (New York: Basic Book, Inc., Publishers, 1986)
5. Peter Berger, "Capitalism and Socialism: Empirical Facts", in *Capitalism and Socialism*, ed. by Michael Novak (Washington D. C.: American Enterprise Institute for Public Policy, 1979)
6. Peter Berger, "Capitalism and Socialism: Ethical Assesment," *Ibid.*, p. 98.
7. Martin E. Marty, Reinhold Niebuhr: Public Theology and the American Experience, *The Journal of Religion* October, 1974, p. 334.
8. マイケル・ワルツァー, 「挫折せる全体主義」『世紀末の診断』(みすず書房, 1985年, 所収), 73 ページ